

JAPIC NEWS

Japan Pharmaceutical Information Center



September
2026
No. 508

9

Contents

● 巻頭言

後発医薬品の安定供給に関する取り組み

日本ジェネリック製薬協会 理事長 河野 典厚 2-4

● トピックス

第28回日本医薬品情報学会総会・学術大会に出展しました 5

● 最近の話題

点鼻液（ジアゼパム、アドレナリン）の新薬承認と学校等での投与について
広島大学病院 薬剤部 特定教授 猪川 和朗 6-7

● インフォメーション

医薬品集 発刊のご案内 8-9

JAPIC「医療用医薬品集 2027」CD-ROM付 9月4日発刊

JAPIC「一般用医薬品集 2027」 9月2日発刊

JAPIC「医療用医薬品集 薬剤識別コード一覧2027」 8月31日発刊

JAPIC「医療用医薬品集2027」

更新情報メールサービス（無料） 申込受付開始

● 外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報よりー（抜粋） 10

● 図書館だより No.434 11

● 情報提供一覧 11

JAPIC
Japan Pharmaceutical Information Center

一般財団法人 日本医薬情報センター

後発医薬品の安定供給に関する取り組み

日本ジェネリック製薬協会 理事長

河野 典厚 Noriatsu Kono



【はじめに】

後発医薬品は、先発医薬品の特許終了後に先発医薬品と品質・有効性・安全性が同等のものであるものとして厚生労働大臣が個別に製造販売承認を与えている医薬品であり、開発費用が安く抑えられることから、その薬価は先発医薬品に比べて低いことが一般的です。このようなことを背景に、政府はこれまで患者負担の軽減や医療保険財政の改善の観点から後発医薬品の使用促進を進めてきています。現在の政府目標としては「医薬品の安定供給を基本としつつ、後発医薬品の数量シェアを2029年度末までに全ての都道府県で80%以上」と定められており、昨今ではその数量シェアは90%近くまで伸びてきていますが、他方で、後発医薬品の今日的課題としては安定供給が重要課題の一つであるところ、この機会に、日本ジェネリック製薬協会が本年2月にとりまとめ公表した「産業構造のあり方研究会報告書（以下「報告書」という。）」の主な点についてご紹介します。なお、以下の記載は著者が報告書の記載を要約し注釈を加えておりますので、必要に応じ原著をご確認いただきますようお願いいたします。

(<https://www.jga.gr.jp/industrial-structure-report.html>)

1. 安定供給不安事象発生の要因

報告書ではこれまでの安定供給不安事象発生の要因分析を行っています。報告書では「これまでの安定供給不安事象発生の要因として

は、個別製薬企業による薬機法違反を契機に新型コロナウイルスの影響なども相まって安定供給不安事象が発生・拡大したこと、後発医薬品製薬企業各社は他社の供給不安事象を補填するよう努めた一方で、代替生産に必要な情報収集や企業同士の連携が困難な状況であったこと、また後発医薬品数量シェアの80%台から90%への拡大にも対応する必要がある中で十分な製造余力がないなど、複合的な要因により対応しきれなかった。」としています。このような状況の中で各社とも設備投資を積極的に行うなど生産能力向上に努めており、具体的には、新型コロナウイルス発生初期に当たる2020年度から2024年度までの5年間での後発医薬品供給量は実績ベースで814億（薬価収載単位）から951億（薬価収載単位）と約137億（薬価収載単位）*、16.8%の増産・供給増実績があります。

2. 生産能力向上及び生産効率化の取り組み

報告書では後発医薬品の需要量予測・供給量予測、これを踏まえたマクロの需給バランスについて試算しています。

まず、後発医薬品の需要予測としては、様々な仮定を置いた前提での試算として、2029年度の後発医薬品の需要量は1,056億（薬価収載単位）*としています。この需要量予測については、今般の政府による長期収載品に対する選定療養制度の見直しや、オーソライズドジェ

ネリック（AG）に対する薬価制度変更など、後発医薬品の需要増につながる制度変更による影響を加味していません。今後、後発医薬品需要が更に伸びる可能性がある中で、仮に現状の後発医薬品の数量シェア約90%が1%上昇して91%となった場合、後発医薬品の需要量としては10～12億（薬価収載単位）程度、更に伸びると指摘しています。

これに対して後発医薬品の供給量予測としては、日本ジェネリック製薬協会が会員各社に対して実施した設備投資計画のアンケート調査を基に試算しています。その結果、2025年11月時点の15社からの集計として、今後2029年度までの5年間における設備投資計画及び設備投資に伴い可能となる追加生産数量（内用剤・注射剤・外用剤における新たに加わる供給可能最大量）としては、5年間合計で約2,580億円の設備投資を計画し、設備更新等を除いた純増生産数量として、内用剤約140億、注射剤約1億、外用剤約3億の合計約144億（薬価収載単位）の追加供給が可能となるよう生産設備を増強する予定との回答が得られています。

これらの結果を踏まえ、将来的な後発医薬品の「需要予測」及び各社の設備投資計画を踏まえた「供給予測」を比較することにより、報告書では今後のマクロの需給バランスを試算しています（【表1】）。この結果、後発医薬品の需要

【表1】今後の試算需要量と各社増産計画を加味した供給量見込み

	2025年度	2026年度	2027年度	2028年度	2029年度
1. 試算需要量	1,003	1,016	1,029	1,042	1,056
2. 供給量見込み	989	1,032	1,058	1,075	1,101
3. 差分(2.-1.)	-14 (-1.4%)	+16 (+1.6%)	+29 (+2.8%)	+33 (3.2%)	+45 (+4.3%)

（注）単位はいずれも「億（薬価収載単位）」として記載

量に対する供給量について、需要予測・供給予測ともに様々な仮定を置いたうえでの試算であるなどの制約はありますが、2026年度には供給量見込みが試算需要量を上回ってほぼ拮抗（+1.6%）してプラスに転じ、その後も徐々に供給可能量が増え、集中改革期間の終期すな

わち2029年度の需給バランスは、試算需要量1,056億に対し供給量見込みが1,101億と試算需要量を上回る（+4.3%）見込みとなっています。この将来予測については、あくまでも現状各社の生産能力が減ることなく計画どおりの設備投資が行われる前提での現時点の試算であって、個別企業の予期せぬ撤退やパンデミックなどによる需要増、後発医薬品の需要増につながる制度変更の影響は織り込まれていません。更に、他社の供給制限が発生した際に一定程度カバーする能力、「製造余力」が現時点では十分確保されているとは言えない状況などを考慮すると、後発医薬品製薬企業各社は、今後、製造余力をいかに確保するか観点から生産能力増強を図るとともに、後発医薬品製造の課題として指摘されている少量多品目構造の改善・品目統合等を通じた生産効率化をより一層進めていくことが必要です。報告書では、今後とも投資計画に基づく生産能力向上の状況及び品目統合等による生産効率化の状況等につき引き続きフォローアップし、適時適切に公表していく必要性を指摘しています。また、マクロの需給バランスだけでなく、個別製品の供給制限を着実に減らしていくことも重要であり、供給制限中の品目数は従前に比べかなり減少してきていますが、各社とも一層努力するとともに、日本ジェネリック製薬協会としてもこれらの状況をフォローアップしていきたいと考えます。

なお、当面続くと予想される後発医薬品の需要増に対応しつつ製造余力を確保するため、後発医薬品製薬企業は、品目統合等を通じた少量多品目構造の改善にも既に積極的に取り組んでいます。政府としても、安定供給確保に向けて後発医薬品製薬企業各社の非効率な生産構造解消が喫緊の課題であることから、品目統合・事業再編等に向けた支援のための基金「後発医薬品製造基盤整備基金」を新たに立ち上げ、昨年12月の補正予算により総額844億円の事業が開始されることとなりました。後発医薬品製薬企業各社はこの枠組みの活用も視

野に入れながら生産効率化に積極的に取り組んでおり、品目統合等に向けて複数の企業による連携・協議が進行しているところです。

3. 後発医薬品を巡る経営環境と将来影響について

報告書では、我が国の後発医薬品市場動向についても触れています。報告書によると、我が国の後発医薬品市場は、直近2024年度で約1兆7300億円（薬価ベース）、同年度の医薬品市場全体約11兆1100億円の約15.5%*を占めています。また、医薬品市場全体が2020年度から2024年度にかけて10.0%増であるのに対し、後発医薬品市場は2020年度から2024年度にかけて0.5%増に留まっています（【表2】）。

【表2】ジェネリック医薬品の市場推移*（金額ベース・単位10億円）

年度	医療用医薬品全体	ジェネリック医薬品
2020年度	10,102	1,717(-)
2021年度	10,353	1,708(対前年度 ▲0.5%)
2022年度	10,509	1,710(対前年度 +0.1%)
2023年度	11,021	1,732(対前年度 +1.2%)
2024年度	11,114	1,726(対前年度 ▲0.3%)

（注）ジェネリック医薬品の市場規模には、各年度の新規後発品のほか、AG及びバイオシミラーを含む。

更に、薬価改定のたびに価格は下がり続け、特に中間年改定が実施されて以降、その下落スピードは加速し、2011年度薬価を100とした場合の2025年度薬価は59.8まで下落しています。このような厳しい環境下においても、後発医薬品製造企業各社は、2020年度から2024年度にかけて、数量ベースで814億（薬価収載単位）から951億（薬価収載単位）*と16.8%の増産を行い、かつ今後も更に増えていく後発医薬品需要を満たすために、2029年度までの5年間で15社合計約2,580億円もの設備投資を計画しています。また、製造設備の老朽化対策も喫緊の課題です。国内後発医薬品市場が拡大しない現状を踏まえると、今後とも市場から得られる1品目当たりの収益はより一層厳しくなると予

想されますが、人件費や物価上昇などの環境変化にも対応しつつ、更には昨今の地政学的リスクを踏まえた対応も必要となる中で、後発医薬品の安定供給体制を将来にわたり維持するためには、制度的にも更なる下支えの仕組みが必要と考えます。

【結びに】

以上、報告書の中でも特に重要な「生産能力向上及び生産効率化の取り組み」及び「後発医薬品を巡る経営環境と将来影響」についてご紹介しました。後発医薬品に置き換え可能な医薬品数量シェアは既に90%程度まで上昇しており、また、後発医薬品は高血圧や高脂血症の治療など、多くの患者さんが日常的に服用しているものが多いと思われます。このような状況を考えると、後発医薬品は、患者個人や医療保険財政にとっての「経済合理性」の提供はもとより、医療分野における社会インフラの一躍を担うものとしてその責務を適切に果たしていく必要があります。日本ジェネリック製薬協会及び関係各社としては、今後とも、患者さんや医療現場の期待に応え、日本の医療へ更に貢献していきたいと考えています。

（注）：本文中の*及び【表2】については、いずれも日本ジェネリック製薬協会会員会社のデータ及び協会会員外も含めた一部IQVIA社のデータ（2016年度～2024年度）をもとに推計、無断転載禁止

第28回日本医薬品情報学会総会・学術大会に出展しました

2026年7月11日(土)から12日(日)に開催された、第28回日本医薬品情報学会総会・学術大会に企業出展しました。今回の開催地は、映画「男はつらいよ」の舞台である、葛飾区柴又もほど近い東京理科大学葛飾キャンパス(東京都葛飾区)です。

今年のテーマは「医薬品情報の「輪」と「共創」」でした。昨年に引き続き現地開催のみとなり、多くの先生が参加され各講演熱心に聴講されていました。

今回のJAPICの企業展示では、主にiyakuSearch-医薬品情報検索システムと重篤副作用疾患別対応マニュアル(書籍版)などのサービスをご案内いたしました。



会場近くの柴又駅にある、フーテンの寅像と見送るさくら像

重篤副作用疾患別対応マニュアルは、厚生労働省と独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページにて公開されている同マニュアルの書籍版です。2019年3月に公開されたマニュアルから「改訂新版」として発刊し、現在第5集まで書籍化しております。掲載内容はHPにて公開されたマニュアルと同じですが、書籍用にレイアウトを変更し見やすくなっており、お手元に置いて内容を確認したいなどのご要望に対応しております。本冊子は直販のため書店では販売しておりません。各書籍に掲載のマニュアルの種類の確認、お申込みは、JAPICのホームページ:HOME>サービスの紹介>書籍>改訂新版 重篤副作用疾患別対応マニュアルをご覧ください。



東京理科大学葛飾キャンパス

「JAPIC NEWS」はホームページからも閲覧出来ます!

本誌『JAPIC NEWS』は、電子媒体(PDFファイル)として、
2004年4月号から最新号までを下記ホームページ上で公開しております。
(最新号のWeb掲載をメールでお知らせするサービスも併せてご利用下さい)

JAPIC NEWS PDF版 掲載サイト

https://www.japic.or.jp/service/whats_new/japicnews/index.php
(下のQRコードからもアクセス可能です)



トップページからはページ下部の
こちらのバナーよりアクセス出来ます!

機関誌
「JAPIC NEWS」
はこちら



最近の話題

点鼻液 (ジアゼパム、アドレナリン) の
新薬承認と学校等での投与について

広島大学病院 薬剤部 特定教授
猪川 和朗 Kazuro Ikawa



はじめに

緊急性の高い場面で用いられる薬剤では、自己注射（家族、学校職員等による投与を含む）が行われてきたが、医療者以外による投与のため、実際の使用に際しては医療技術的・心理的なハードルが高かった。経鼻製剤は、自己投与がより簡単、注射剤と比べて侵襲性が低い、経口剤と比べて吸収が速く肝臓初回通過効果も回避で

きる等の利点がある。2024年10月には、経鼻弱毒生インフルエンザワクチン点鼻液（フルミスト®）が販売された。近年、吸収促進剤（ドデシルマルトシド等）や投与デバイスに関する技術が発展したことで、新たな経鼻製剤の開発が進んでいる。このたび、新投与経路医薬品として2つの点鼻液が承認され、あわせて、学校等での投与に関する事務連絡が通知されたので紹介する。

○ジアゼパム点鼻液（スピジア®）

ジアゼパムは、 γ -アミノ酪酸（GABA）A受容体のベンゾジアゼピン結合部位に結合することで、神経細胞の興奮を抑制して抗けいれん作用を示す。すでに錠剤、散剤、注射剤および坐剤が承認されている。ただし、院外では注射ができないため選択肢が限られていた。けいれん発作は30分以上持続すると長期的な後遺症を残す可能性があるため、てんかん重積状態は早期の治療介入が特に重要であり、経鼻製剤が開発された。

本剤は、保護者（家族）またはそれに代わる適切な者が投与する場合が想定され、添付文書で「1.警告」や「8.重要な基本的注意」等が設定されている（【表1】）。用法・用量は「通常、成人及び2歳以上の小児にはジアゼパムとして、患者の年齢及び体重を考慮し、5～20 mgを1回鼻腔内に投与する。効果不十分な場合には4時間以上あけて2回目の投与ができる。ただし、6歳未満の小児の1回量は15 mgを超えないこと」であり、年齢・体重に応じた投与方法のため3規格（5mg、7.5mg、10mg製剤）が販売されている（【表2】）。

○アドレナリン点鼻液（ネフィー®）

アドレナリンは、交感神経 α 受容体を介して末梢血管収縮作用を、 β 1受容体を介して心筋収縮力増強・心拍数上昇作用を、また β 2受容体を介して骨格筋の血管床弛緩作用を示す。すでに外用剤および注射剤が承認されており、2003年には自己筋注できるオートインジェクター製剤が使用可能となった。アナフィラキシーは、重篤な全身性過敏反応の最も重症な状態であり、急速に発現して死に至ることもある。病院外での緊急時に迅速対処するためがあるため、より簡便な治療選択肢として経鼻製剤が開発された。

本剤では、患者本人、保護者または適切な者が投与する場合が想定されている（【表1】）。用法・用量は「通常、体重30 kg未満の患者には、アドレナリンとして1回1 mgを、体重30 kg以上の患者には、アドレナリンとして1回2 mgを鼻腔内に投与する」であり、年齢・体重に応じた投与方法のため2規格（1mg、2mg製剤）が販売されている（【表2】）。

【表1】点鼻液剤の概要

日付	承認・2025年6月24日、販売・2025年12月24日	承認・2025年9月19日、販売・2026年2月12日
一般名	ジアゼパム	アドレナリン
販売名	スピジア点鼻液5mg、7.5mg、10mg	ネフィー点鼻液1mg、2mg
効能・効果	てんかん重積状態	蘇毒、食物及び薬物等に起因するアナフィラキシー反応に対する補助治療（アナフィラキシーの既往のある人またはアナフィラキシーを発現する危険性の高い人に限る）
警告（抜粋）	1. 本剤を交付する際には、本剤交付前に保護者（家族）又はそれに代わる適切な者が投与できるよう、本剤の投与が必要となる症状の判断方法、本剤の保存方法、使用方法、使用時に発現する可能性のある副作用等を保護者（家族）又はそれに代わる適切な者が理解したことを確認した上で交付すること。	1.1 本剤を患者に交付する際には、必ずインフォームドコンセントを実施し、本剤交付前に自らが適切に自己投与できるよう、本剤の保存方法、使用方法、使用時に発現する可能性のある副作用等を患者に対して指導し、患者、保護者又はそれに代わり得る適切な者が理解したことを確認した上で交付すること。 1.2 本剤を患者に交付する際には、患者、保護者又はそれに代わり得る適切な者に対して、本剤に関する患者向けの説明文書等を熟読し、また、本剤の練習用見本を用い、日頃から本剤の使用法について訓練しておくよう指導すること。
禁忌	2.1 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者 2.2 急性閉塞性角膜炎の患者 2.3 重症筋無力症の患者 2.4 リトナビル（HIVプロテアーゼ阻害剤）、ニルマレルビル、リトナビルを投与中の患者	2. イソプレナリン、ノルアドレナリン等のカテコールアミン製剤、アドレナリン作動薬を投与中の患者（ただし、蘇生の緊急時はこの限りでない）

【表2】点鼻液剤の用法・用量および関連する注意等（添付文書に基づき筆者作成）

ジアゼパム点鼻液（スピジア®）					
2歳未満年齢<6歳	6歳未満年齢<12歳	12歳未満年齢	1回目投与	2回目投与	
6kg≦体重<12kg	10kg≦体重<19kg	14kg≦体重<28kg	1回目投与	1回目投与	1回目投与
12kg≦体重<23kg	19kg≦体重<38kg	28kg≦体重<51kg	1回目5mg	5mg製剤×1個	片方の鼻腔に1回
23kg≦体重	38kg≦体重<56kg	51kg≦体重<76kg	1回目10mg	10mg製剤×1個	片方の鼻腔に1回
			1回目15mg	7.5mg製剤×2個	両方の鼻腔に1回ずつ
			1回目20mg	10mg製剤×2個	両方の鼻腔に1回ずつ
※必要な医療機器・薬剤等が使用可能で、医師の監視下での院内投与。					

アドレナリン点鼻液（ネフィー®）		
4歳未満年齢	1回目投与	2回目投与
体重<15kg ※原則として1mg製剤は15kg以上に投与すること。	本剤を15kg未満（4歳未満）の患者に投与した成績はない。15kg未満に1mgを投与すると、過量となるおそれがあるので、副作用発現等に十分注意が必要であり、通常のアドレナリン注射剤使用についても考慮する必要がある。	
15kg≦体重<30kg	1回1mgを鼻腔内に投与	効果不十分な場合には、1回目投与から10分以降を目安に、2回目投与ができる。2回目投与時は1回目と同一鼻孔に投与することが望ましい。
30kg≦体重	1回2mgを鼻腔内に投与	

学校等における点鼻液の投与について

学校・保育所・認定こども園等（学校等）で、幼児・児童、生徒、学生等（児童等）が発症し危険な状態である場合、自ら投与できない状況が想定され、緊急やむを得ない措置として現場に居合わせた教職員・スタッフ等（教職員等）が投与する状況が想定される。これらの投与に関する医師法の解釈が、厚生労働省からの回答を経て、こども家庭庁・文部科学省から通知^{1,2)}され、両薬剤の投与環境が整備された（以下、紙面の都合上「発症（てんかん発作またはアナフィラキシーショック）」、「点鼻液（ジアゼパムまたはアドレナリン）」と表記）。

学校等においては、児童等およびその保護者から、発症（てんかん発作またはアナフィラキシーショック）時の点鼻液（ジアゼパムまたはアドレナリン）の投与について依頼があった場合、下記の4条件①～④に基づき、医師の指示を確認するとともに、保護者等と対応について協議を行い、共通理解を図る必要がある。また、児童等が発症した場合に適切な行動ができるよう、教職員等で日頃からの準備として定期的な研修や訓練を行うこと等も重要である。発症時には、当該児童等が意識を失っている場合も想定されるため、傷病者発生時の対応に準じて、教職員等が連携して、迅速・的確な応急手当（一次救命処置）、保護者や医療機関への緊急連絡、救急要請等による医療機関受診が重要である。その上で、点鼻液を使用した場合には、発症した児童等が受診することになる医療機関の医療従事者が、使用済みの容器をもとにその投与状況を確認するため、医療従事者または救急搬送を行う救急隊に使用済みの容器を受け渡すとともに、実施した内容を伝える等の対応が必要である。

なお、0～5歳の乳幼児に対しては、保育所等においてジアゼパム点鼻液を預かり、教職員等が投与することは想定されていない。

<医師法第17条違反とならないための4条件>

①当該児童等およびその保護者が、事前に医師から、次

の点に関して書面で指示を受けていること。

●学校等においてやむを得ず点鼻液（ジアゼパムまたはアドレナリン）を使用する必要性が認められる児童等であること

●点鼻液を使用する際の留意事項

②児童等およびその保護者が、学校等に対して、やむを得ない場合には児童等に点鼻液を使用することについて、具体的に依頼（医師から受けた点鼻液を使用する際の留意事項に関する書面を渡して説明しておくこと等を含む。）していること。

③児童等を担当する教職員等が、次の点に留意して点鼻液を使用すること。

●児童等がやむを得ず点鼻液を使用することが認められる児童等本人であることを改めて確認すること

●点鼻液を使用する際の留意事項に関する書面の記載事項を遵守すること

④児童等の保護者または教職員等は、点鼻液を使用した後、児童等を必ず医療機関で受診させること。

おわりに

両薬剤の使用条件、適応患者、用法・用量および関連する注意等は厳格で精密に設定されている。実際の現場で迅速対応し適正投与するためには、事前の準備、使用手順・注意事項の熟知や訓練が欠かせない。このため専用サイト^{3,4)}には、フローチャート、アクションプラン、講習動画、投与練習用製剤（要申込）など様々な資材が用意されている。今後、適正使用の広がりとともに同様の経鼻製剤の開発を期待したい。

文献

- 1) こども家庭庁・文部科学省、事務連絡「学校等におけるてんかん発作時のジアゼパム点鼻液（スピジア®）の投与について」2026年4月16日。
https://www.mext.go.jp/content/20260427-mxt_kenshoku-000031776_5.pdf
- 2) こども家庭庁・文部科学省、事務連絡「学校等におけるアナフィラキシーショック時のアドレナリン点鼻液（ネフィー®）の投与について」2026年4月16日。
https://www.mext.go.jp/content/20230919-mxt_kenshoku-000031769_2.pdf
- 3) ヴィアトリス製薬合同会社、「スピジア®」サイト。 <https://spydia.jp/>
- 4) アルフレッサファーマ株式会社、「ネフィー®」サイト。
<https://www.neffy.net/>

Information

インフォメーション

医薬品集 発刊のご案内

JAPIC「医療用医薬品集2027」CD-ROM付 9月4日発刊

- ◇2026年6月の後発品収載分までの情報を収載。
- ◇医療用医薬品電子添文情報を有効成分(約2,300成分)ごとにまとめて掲載。
約1,400成分については「構造式」も掲載。
- ◇同一成分内での剤形の違い・製品の違いにより効能・効果が異なる場合はその違いを明記。
- ◇医療用医薬品電子添文情報・一般用医薬品添付文書情報・医療用医薬品識別コード情報を収録し、最新医療用医薬品電子添文へのリンク機能*を搭載した検索用CD-ROM(インストール版)を添付。
*インターネットを経由してJAPICが運営するiyakuSearch掲載の電子添文PDFを表示
- ◇3分冊(分冊1:五十音索引+本文前半、分冊2:五十音索引+本文後半、分冊3:欧文索引+薬効別索引+付録+薬剤識別コード一覧)でのご提供。
- ◇更新情報メールの無料提供(要登録)。

◆価格:14,300円(税込)・B5判



JAPIC「一般用医薬品集2027」 9月2日発刊

- ◇国内流通の一般用医薬品、約10,000製品を収録(2026年7月までの一般用医薬品情報を収録)。「使用上の注意」の最新通知が盛り込まれた便利で使いやすい内容。薬局・ドラッグストア等におけるDI活動の資料等にご活用ください。
- ◇最新の添付文書を日本製薬団体連合会の委託を受け収集。国内流通の一般用医薬品をほぼ全て網羅。
- ◇医薬品ごとのリスク区分の記載を本文及び索引に掲載。また、一般用医薬品販売時に文書による説明義務がある第1類医薬品をまとめた「第1類医薬品一覧」、スイッチ直後品目・劇薬等の「要指導医薬品一覧」を収録。
- ◇付録には、重篤副作用疾患別対応マニュアル、国内副作用報告の状況、セルフメディケーション税制対象品目一覧、一般用医薬品のリスク区分一覧、一般用生薬製剤の使用上の注意、ブランド名別に成分の相違がよくわかるブランド名別成分比較表等の参考情報を収録。

◆価格:9,900円(税込)・B5判



〔お問合せ先〕事務局 渉外担当(TEL:0120-181-276、FAX:0120-181-461)

医薬品集 発刊のご案内

JAPIC「医療用医薬品集 薬剤識別コード一覧 2027」8月31日発刊

- ◇識別コードから薬剤の商品名を調べられる一冊。
- ◇医療用医薬品集掲載の医薬品のうち、
電子添文に識別コード・包装コードの記載のある品目を掲載。
- ◇原則として、電子添文に基づき記載。
掲載項目は識別コード、色・割線、商品名(会社名)、一般名、規格単位、
薬効からなり、医療用医薬品集本文の掲載ページも記載。
- ◇ご利用しやすいよう薬剤識別コードの数字順、英字順、マーク順に配列。
会社ごとのマーク一覧についても併せて掲載。

◆価格:1,100円(税込)・B5判



〔お問合せ先〕事務局 渉外担当(TEL:0120-181-276、FAX:0120-181-461)

JAPIC「医療用医薬品集2027」更新情報メールサービス(無料) 申込受付開始

- ◇JAPIC「医療用医薬品集2027」CD-ROM付をご利用の
ユーザ様を対象に、収録内容の更新情報を無料でご提供
するサービスです。
- ◇新薬・その他重要な改訂(効能効果・用法用量・禁忌・
重大な副作用等)等の情報を更新した医薬品集項目の
PDFをwebサイトで閲覧・ダウンロードが可能です。

《ご利用方法》

登録フォーム(URL:<https://www.japic.or.jp/iryou2027.html>)に必要事項を入力し、お申込み下さい。ご登録頂いたメールアドレスに、更新情報を公開しているwebサイトのURLを毎月送信いたします。配信期間は2026年9月～2027年5月を予定しています。

第1回 JAPIC「医療用医薬品集」20XX 更新情報 20XX年9月版

(番号 XX-09-1-01~XX-09-1-78)

20XX年9月30日までに一般財団法人日本医薬情報センターが入手した添付文書のうち、【効能効果】、【用法用量】、【警告】、【禁忌】、【原則禁忌】、【併用禁忌】、【原則併用禁忌】、【重大な副作用】の改訂を重要な改訂と考え、更新情報として提供させていただきます。また、薬価収載など承認事項に関連した情報についても可能な限り追加しています。

※JAPIC「医療用医薬品集」20XXの該当ページに貼付してご利用下さい。

※下表コメント欄の「改訂指示」は、厚生労働省「使用上の注意の改訂指示」通知内容の反映を表しています。

※20XX年9月XX日承認の新薬・報告品につきましては、近日中に更新情報として提供させていただく予定です。

【新しく追加された製品】  【PDF一括表示】 ※表示に時間がかかることがあります。

【更新情報20XX年9月版】▶[更新履歴一覧ページ](#)

番号	項目表題	PDF	該当頁	改訂・変更箇所	コメント(厚生労働省「使用上の注意の改訂指示」等)
XX-09-1-01	アジサルタン		43	【製品】、【組成】、 【用法・用量】、 【用法関連注意】、 【併用禁忌】	アジサルタン錠10・20・40mg(武田薬品)の用法追加(20XX年9月)に伴う記載変更。製品欄にアジサルタン錠1% (武田薬品)を追加。それに伴う記載変更。併用禁忌新設。

外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より - (抜粋)

2026年7月1日～7月31日分のJAPIC Weekly News(No.1059-1063)の記事から抜粋

■米FDA

- エボラ疾患と献血に関する血液関連施設向けの重要情報

<https://www.fda.gov/vaccines-blood-biologics/safety-availability-biologics/important-information-blood-establishments-regarding-ebola-disease-and-blood-donation>

■Health Canada

- Summary Safety Review—finasterideおよびdutasteride—自殺念慮の潜在的リスクの評価

<https://dhpp.hpfb-dgpsa.ca/review-documents/resource/SSR1781100269999>

- TAVNEOS (avacopan)とHealth Canadaによるデータ整合性に関する懸念事項のレビュー

<https://recalls-rappels.canada.ca/en/alert-recall/tavneos-avacopan-and-health-canada-s-review-data-integrity-concerns>

■EU・EMA

- Direct healthcare professional communication (DHPC): Ixchiq (Chikungunya vaccine (live)): チクングニヤ感染症の罹患リスクが高いヒトに使用を制限

https://www.ema.europa.eu/en/documents/dhpc/direct-healthcare-professional-communication-dhpc-ixchik-chikungunya-vaccine-live-use-restricted-individuals-high-risk-acquiring-chikungunya-infection_en.pdf

- Direct healthcare professional communication (DHPC): Tavneos (avacopan)ーベネフィット・リスクバランスが良好でないことによる、EUにおける販売承認撤回の勧告

https://www.ema.europa.eu/en/documents/dhpc/direct-healthcare-professional-communication-dhpc-tavneos-avacopan-recommendation-revocation-marketing-authorisation-eu-due-unfavourable-benefit-risk-balance_en.pdf

- 父親のvalproate[valproic acid]および関連物質への曝露に伴う神経発達障害のシグナル評価報告 (EPITT no: 20191)

https://www.ema.europa.eu/en/documents/prac-recommendation/signal-assessment-report-neurodevelopmental-disorders-paternal-exposure-valproate-related-substances_en.pdf

■英MHRA

- 英国人ドナー由来の血漿、新たな医薬品への使用が承認された

<https://www.gov.uk/government/news/mhra-safety-review-gives-uk-plasma-donations-go-ahead>

- domperidone: 重度高血圧のリスクによる褐色細胞腫患者の新たな禁忌

https://assets.publishing.service.gov.uk/media/6a5e2a4f8b7e4fa537e693c0/Domperidone_new_contraindication_in_patients_with_phaeochromocytoma_due_to_the_risk_of_severe_hypertension.pdf

■豪TGA

- Medicine Safety Update: GLP-1受容体作動薬 (GLP-1 RA) および稀な視覚障害

<https://www.tga.gov.au/news/safety-updates/glp-1-ras-and-rare-vision-disorder>

■医薬品医療機器総合機構

- ピボキシル基を有する抗菌薬投与による小児等の重篤な低カルニチン血症、重篤な低血糖について (続報)

<https://www.pmda.go.jp/files/000281371.pdf>

- 「ガストログラフィン経口・注腸用」ニトロソアミン化合物検出のお知らせ (第2版)

<https://www.pmda.go.jp/files/000281682.pdf>

■厚生労働省

- ICH E11A 小児用医薬品開発における外挿に関するガイドラインについて

<https://www.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/T260707I0010.pdf>

- 在宅酸素療法における火気の取扱いについて

https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000003m15_1.html

JAPIC事業部門 医薬文献情報(海外)担当

記事詳細およびその他の記事については、JAPIC Daily Mail(有料)もしくはJAPIC Weekly News(無料)のサービスをご利用ください(JAPICホームページのサービス紹介:<<https://www.japic.or.jp/service/>>参照)。JAPIC Weekly Newsサービス提供を御希望の医療機関・大学の方は、事務局 渉外担当(TEL 0120-181-276)までご連絡ください。

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。

この情報は附属図書館の蔵書検索 (<https://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧いただけます。

これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。

閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越しください。

〈配列は洋書、和書別に書名のアルファベット順、五十音順〉

書 名	著 者	出版者	出版年月
第十九改正日本薬局方医薬品情報 JPD1 2026	公益財団法人日本薬剤師研修センター 編	株式会社じほう	2026年7月10日

情報提供一覧

2026年8月1日～8月31日提供

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	更新頻度
〈出版物・CD-ROM等〉		〈iyakuSearch〉 Free https://iyakusearch.japic.or.jp/	
1. 「一般用医薬品 (経済課コード)」 2026年7月分 (HP定期更新情報掲載)	8 月 1 日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2. JAPIC 「医療用医薬品集 薬剤識別コード一覧 2027」	8 月 31 日	2. 学会演題情報	月 1 回
3. 「JAPIC NEWS」 No.508 2026年9月号	8 月 31 日	3. 医療用医薬品添付文書情報	毎 週
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (郵送、電子メール等で提供)		4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
1. 「JAPIC Pharma Report海外医薬情報速報」	毎 週	5. 日本の新薬	随 時
2. 「医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)」	毎 週	6. 学会開催情報	毎 日
3. 「JAPIC-Q Plusサービス」	月 1 回	7. 医薬品類似名称検索	随 時
4. 「JAPIC-Q 医療機器情報サービス」	月 2 回	8. 効能効果の対応標準病名	月 1 回
5. 「外国政府等の医薬品・医療機器の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)」	毎 日	9. ブルーブック連携データベース	随 時
6. 「JAPIC Weekly News」	毎 週	〈iyakuSearchPlus〉 https://iyakusearch.japic.or.jp/	
7. 「感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)」	毎 週	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
		2. 学会演題情報プラス	月 1 回
		3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日
		4. Where	随 時

外部機関から提供しているJAPICデータベース

〈株式会社ジー・サーチJDreamⅢから提供〉 <https://jdream3.com/>

2026年9月
発刊

JAPIC

医療用医薬品集2027

14,300円
(税込)B5判本書の
特長

- ◆国内流通全医薬品の最新で正確な電子添文情報をお届け
- ◆2026年6月後発品まで収載
- ◆薬剤識別コード一覧を収載
- ◆Windows版CD-ROM付
(医療用および一般用医薬品情報を収録、電子添文PDFの表示機能(要ネット)を搭載)

JAPIC

一般用医薬品集2027

9,900円
(税込)B5判本書の
特長

- ◆国内流通の一般用医薬品(約10,000製品)を収録
- ◆2026年7月までに入手した情報を収録
- ◆本文および索引に医薬品ごとのリスク区分を掲載
- ◆付録には「ブランド名別成分比較表」等を収録

一般財団法人 日本医薬情報センター JAPIC 編集・発行
丸善出版株式会社 発売

上記書籍の他、電子カルテやオーダーリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データおよび病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC(TEL0120-181-276)まで。



このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。リフレッシュにどうぞ!!

うこんさんごばな

「鬱金珊瑚花」と書く。学名: *Pachystachys lutea*. 英名: Golden shrimp plant. きつねのまご科ばきすたき属。中南米、西インド諸島原産の非耐寒性常緑低木。国内では温室栽培。花期は初夏から秋。黄色い紡錘状の苞から白い舌のような花を咲かす。chromen系 Chrysin (NO産生増強による血管拡張作用) 等含有。(hy)



JAPICホームページより
<https://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。